神田外語大学留学生受け入れの現状と支援システム

１．留学生受け入れの現状

神田外語大学では 2000 年 9 月留学生別科が開講し、その半年後の 2001 年 4 月から国際コミュニケーション学科と国際言語文化学科新設に伴い学部留学生の受け入れが開始した。2004 年度には、留学生別科に 120 名（正規プログラムの 63 名に加え、短期契約プログラム 57 名）、学部には一年生から四年生の 96 名、合計 216 名の外国人留学生（以下留学生と略記）が在籍している。留学生の出身国については、学部留学生の方は中国と韓国を中心としたアジア出身者が多いが、留学生別科では、海外指定校との交換留学制度や海外留学派遣機構との協定を進める大学の方針によりアメリカを中心に、ヨーロッパ、オセアニア、アジア各国からの留学生も多く迎えて、キャンパス内には多言語、多文化が共生する環境が存在する。2004 年秋学期現在の留学生数は下記の表の通りである。

表１：　2004 年 12 月現在在学中留学生数（神田外語大学国際交流課資料より）

外国語学部　（96 名）		留学生別科　（120 名）	
学生数内訳	出身国	学生数内訳	出身国
１年生　28 名 ２年生　32 名 ３年生　33 名 ４年生　3 名	中国　75 名 韓国　17 名 台湾　1 名 タイ　1 名 カンボジア　1 名 ブラジル　1 名	正規プログラム： 交換留学生 36 名 私費留学生 27 名 契約プログラム： IES 生　57 名	アメリカ　61 名 中国　21 名 韓国　16 名 ベトナム　3 名 タイ　3 名 インドネシア　2 名 台湾　4 名 ニュージーランド 2 名 フィンランド　2 名 ブラジル　2 名 デンマーク　1 名 イタリア　1 名 ミャンマー　1 名 ウクライナ　1 名

２．留学生支援システム発足の背景

言うまでもなく、世界各国から留学生を受け入れ、ニーズに応じた留学生対象の日本語科目だけを提供してもそれで問題が解決し、大学が国際化するわけではない。多様な目的と期待を抱いて入学してくる留学生と、受け入れ側の学生とが互いに大きな興味や関心を抱き交流を希望しながらも、自然に任せているだけではより深い相互理解や活発な交流には進まないということは、国内外の研究からも明らかであり、本学の現状も同様といえる。互いにどのようにして友達になればいいのか、どのような文化、価値観を持っているのか、実際には知らないことばかりである。日本で学ぶ留学生の大半がアジアからの学生である

にもかかわらず、その事実を留学生とかかわった体験の少ない受け入れ学生が実感するのは難しいだろう。留学生交流というと英語圏からの学生をイメージし、英語の練習になると考え活動に参加する日本人学生も多い。教室で一緒に授業を受けている学部留学生に対してさえ、直接話してみるまでは留学生は日本語ができないと思い込んでいる受け入れ学生も多く、留学生支援活動を通して初めて「日本語が上手なので驚いた」という学生も少なくない。外語大学であり学生自身も言葉や異文化に対して興味や関心が高いことは確かであるが、だからといって学生たちの主体性に任せて自然な出会いから生じる異文化体験による異文化間教育の効果を期待したり、多くの中国や韓国からの留学生と彼らの言語を専攻する学生が、相互のニーズに応じて自主的に学習機会を持ち、親しい友人関係へと発展するだろうと期待することは現実的とはいえない。

さらに留学生支援を考える際に、日本人学生とは異なる留学生の特質を忘れてはならない。留学生は一般的に、①異文化背景を有する、②留学以前の人間関係やソーシャルサポートから切り離されている、③言語的意思疎通が難しい、④日本文化の文脈を読めない、⑤自尊心の低下、⑥固有の問題による高いストレスが常にある、などがその特徴としてあげられる。さらに加えて、多くの留学生は人間としての成長過程のなかで青年期の発達課題を抱えていると考えられる。異文化接触体験と青年期の課題を同時に抱えているという彼らの特徴を考慮した支援活動を考える必要がある。

多くの教育機関で実施されてきた留学生と受け入れ学生とのインターフェイス活動では、各機関が対象学生に応じた様々な方法で実践がなされているが、そこには援助者と被援助者という構図ができやすいという問題も忘れてはならない。そこからは本当の意味で相互に尊重し、理解する人間関係は生まれない。まして前述した留学生の特徴を考慮すれば、なおさら対等な人間関係の中で相互にかかわりを深められるような活動の提供が望まれる。

上述の通り、留学生受け入れから数年が経過し、支援制度構築にむけ少しずつ取り組んできたが、課題はまだ山積している。その中でもまず取り組むべき課題を２つあげると、ひとつ目は留学生支援体制を制度化すること、二つ目は学内における留学生支援への意識の向上が考えられる。前者についていえば、興味･関心の高い学生や担当の教職員だけが留学生支援や支援活動にかかわっているという現状がある。積極的に活動に参加、協力する学生は当然複数の活動にも参加するため、一部の学生への負担が増し、卒業すれば後が続かないという問題が生じる。教職員の場合も同様であり、常に交代できるシステムにしておく必要がある。さらに、支援は学生が入学する初期だけに必要なものではなく、変化するニーズや学生の成長過程、異文化適応過程に応じて、いつでも必要な支援が得られる態勢を整えておくことが必要である。そのためには、必要な人材配置を可能にする予算確保も含めた制度化が必須となる。さらに、学内ネットワークを学外に広げるためにも、地域社会との連携策を考えることも必要であろう。後者の支援制度に対する学内の意識形成のためには、留学生担当教職員、日本語教育担当教員、留学生を多く受け入れている学科と、留学生の母語と専攻語が同じ学科との有機的連携体制を作り、留学生支援状況などを常に学内に発信し、必要な協力体制を立ち上げることが重要となる。

留学生支援という考え方は、制度としては留学生を支援する活動と考えられる。しかし実際に活動に参加した受け入れ学生にとっても、留学生とのインターフェイスから人間と

しての息遣いが感じられる体験をし、実に多くの学びと気づきを得る機会となっていることが伺える。換言すれば、留学生受け入れとそれに伴う支援システム構築は、留学生、受け入れ学生双方にとっても、絶好の異文化間教育の機会となる可能性を秘めているといえる。双方の学生にとって、ひいては大学全体にとってより有効な留学生支援体制を中期的、長期的に築いていくためにも、本研究からの知見をぜひ生かしたい。

３．KUIS 留学生支援活動の実施状況

ここでは、以上述べてきた学内多文化共生の理念を踏まえて、2004 年度までに神田外語大で実施された主な留学生支援活動を紹介したいと思う。

３．１　実施の目的

各支援活動は留学生支援システムのもとで実施されたわけだが、留学生支援のみならず、次の学内国際交流を促進することを目指していた。

異文化コミュニケーションの場作り

所属学科や、学年、カリキュラムなど制度的な要因から、同じ大学で学ぶ学生同士であるにもかかわらず受け入れ学生と留学生のインターアクションが取りにくい現状を、様々な交流機会を提供、実施することで改善し交流促進をめざす。

多言語多文化共生

留学生も受け入れ学生も日本というセッティングで外国語を学ぶことになっているが、ホスト言語の日本語、あるいは国際語の英語に依存しがちのインターアクションの枠を越え、お互いの言語や文化を学び合い、お互いを尊重したコミュニティを創ることを意識するようになる。

ソーシャル・ネットワークの土台作り

特に来日したばかりの留学生は心細く、一人で問題解決してしまう事態に陥ることが少なくない。留学生または受け入れ学生は、各自のニーズと興味に合った支援活動に参加することによって、ペアまたはグループでの活動が可能になり、個人のソーシャル・ネットワーク作りに役立つ。ネットワーク内の情報交換により、個々の情報の発信、共有を図ることも可能になる。

互恵的言語支援

留学生、受け入れ学生は各自の母語の言語能力を生かして、常にネーティブスピーカー(NS)とノンネーティブスピーカー(NNS)の立場で、言語を相互にサポートできるようになる。

３．２　活動の種類

2004 年度本学で実施された主な留学生支援活動として、(1) 新生活支援、(2) 学習支援、(3) 授業支援、の 3 つを挙げることができる。それぞれの活動については、留学生の所属、

レディネスや、ニーズ、入学の時期などに応じて、関係者があらかじめ一般学生を呼びかけ、協力者を募る形で行われた。

新生活支援

神田外語大に新しく入学した留学生に新生活をサポートする目的で、次の３種類のボランティアを募集し、さまざまな活動を行った。

① バディ：

留学生別科正規プログラムの新入生の手助けをする活動である。初めて来日した留学生が安心して日本の生活をスタートできるようにするために、学部生が留学生のバディになり、空港へ出迎えたり、大学構内を案内したり、買い物などを手伝ったりする。バディは基本的に留学生の来日直後から授業開始前のオリエンテーション期間中まで活躍する。

② E-pal：

留学生別科契約短期プログラムの新入生（全員アメリカ大学生、主に初中級日本語学習者）の手助けをする活動である。メール交換を通して、留学生が来日前の留学に対する心の準備、来日後相互理解を促すことをめざす。E-pal になる学部生が空港への出迎えや買い物なども手伝う。

③ 日本語パートナー：

学部留学生と友人ネットワークを作る活動である。学部留学生の多くは１年から２年日本での生活経験を有し日本語能力試験１級合格者ではあるが、本学に入学し不慣れな大学環境や学生生活に戸惑うことも多い。そんな時、交流を希望する受け入れ学生と身近に付き合うことで、大学生活の一歩をスムーズに踏み出すことができる。

学習支援

① チューター：

留学生別科では発足時から留学生全員を対象に日本語母語話者のチューター紹介が行われている。チューターというのはプロの日本語教師ではなく、あくまでも１人の日本語母語話者であり、留学生の話し相手と相談役にすぎない。チュータリング自体は無償だが、日本語教育を専門にしたい日本語教授法の履修生や日本語教育専攻の大学院生の積極的な参加が期待される。

② 学習相談員：

レポート・論文のテーマ設定、文章構成、口頭発表準備など、大学生として必要な学習技術や日本語表現について、必要なとき気軽に先輩学生に相談ができるように学習相談員のシステムがある。これは学部留学生全員を対象にした学習面でのサポートが中心になる。

授業支援

① クラスビジター：

留学生別科では、日本語授業活動の一環としてあらかじめ日本語母語話者のクラスビ

ジターを依頼し、留学生といっしょに作業をするビジターセッションを行うことが多い。クラスビジターは必要に応じて随時募集がなされるため、時間が合えば、だれでも参加可能である。日本語授業の門戸の開放によって、留学生・受け入れ学生の相互理解を促進することが期待される。

② 協働学習のための合同授業：

外語大という学習環境を生かして、留学生の日本語科目と学部生の一般科目授業との合同授業実施や、協同学習を展開する可能性は大きい。例えば、別科の留学生は CALL クラスで日本語の課題として各自作成したホームページを、異文化コミュニケーションを学ぶ学部生に口頭発表形式で紹介し、社会文化問題について意見交換を行った。このような多文化クラスの実践を通して、様々な文化にじかにふれ体験的に学びを深めることが可能になる。

2004年度実際に行われた各支援活動の状況については本第II部最後にある付録の通りである。

３．３　実施のスケジュール

学内の留学生プログラムは多様であるため、入学時期と支援活動の目的によって、実施のタイミングを調整する必要がある。上で述べた各活動は原則として次のように実施される。

① バディ：　別科正規プログラムでは春（4月）と秋（9月）に新入生を受け入れるため、それぞれの学期最初にあるオリエンテーション期間を含め、その前後合計約３週間実施する。

② E-pal：　別科契約短期プログラムは春（4－7月）、夏（6－7月）、秋（8－12月）の 3 回あるため、それぞれの学期開始前から E-pal を募って、email 交換を実施する。

③ 日本語パートナー：学部留学生の新入生が 4 月入学時に日本語パートナーを紹介してもらい、活動の回数や内容は自分のパートナーと相談しながら行う。

④ チューター：４月と９月の履修登録終了後から学期末まで、基本的に週１回、１－２時間程度のペースのチュータリングを勧めている。日本語会話、作文練習など、内容はチューターと相談しながら行う。

⑤ 学習相談員：前期と後期の履修登録終了後から学期末試験前まで、昼休みの時間を利用して活動する。数名の学習相談員が日替わりで相談コーナーに在席するので、必要な学生は直接コーナーへ行き、昼食を取りながら相談に応じてもらえる。

⑥ ビジター：日本語授業のシラバスに従って、随時募集し、実施する。ビジターは自分の時間割に合わせて自由参加。

⑦ 合同授業：合同授業の内容と実施方法により、教員同士が実施のタイミングを調整する。

３．４　参加者

留学生の支援活動は基本的には全学の学生（一般学生および留学生）を対象にしているが、運営上次のような体制で参加者を限定する。

① 留学生：　所属の学科・プログラムによって支援活動が異なるので、オリエンテーションや学期中の説明会などで関係者から説明とアドバイスと受け、適した支援活動に参加する。

② 一般学生：　前節の紹介にあるように、学部と大学院を合わせて 3000 人前後の在学者は、英語、中国語、スペイン語、韓国語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語、ポルトガル語のいずれかを専攻している。中に、さらに言語研究、コミュニケーション研究、比較文化研究、地域国際研究を中心に学んだり、日本語教師養成プログラムを履修し、日本語教授法を学ぶ学生もいる。それぞれの学生は所属学科の教師の紹介や、説明会や ML（後述）を通して留学生支援のネットワークメンバーになり、自分の興味と都合にあわせて留学生支援の活動に参加することができる。

③ そのほか：　現在は学内教職員のみだが、将来的には地域社会とのネットワーク構築、外部ボランティアとの連携も視野に入れる必要が考えられる。

３．５　募集方法

募集方法についてはキャンパス内のポスターによる宣伝や個人紹介以外に次の 2 通りで一般学生の参加を呼びかける。

① 説明会

春、秋の学期開始時、留学生支援システムの紹介とメーリングリスト参加者募集のための説明会を行う。国際交流に興味を持つ学部生・大学院生は自由参加。学期末には必要に応じてチューターやバディの追加募集を行う。

② メーリングリスト（ML）

大学学部でも本格的に留学生の受け入れが開始した 2002 年度以降は、留学生支援活動参加者メーリングリスト（以下 ML と略記）を立ち上げた。各支援活動の連絡網として、学部生と大学院生を ML に登録し、教務、学部、別科が各々の支援活動を行う際、この ML 上で呼びかける方法を開始した。

現在 ML は一般学生すべてを対象とした登録制度となり、登録期間は 5 月連休明けから次年 4 月末までの 1 年間とし毎年更新する方針である。新規登録者の学内呼びかけは、学内チラシ掲示、大学 HP 掲載、オリエンテーション･ガイダンス期間を利用した説明会などで行う方向になりつつある。登録後は定期的（半期毎）に登録者への継続確認を行うようにし、情報管理、必要に応じた内容訂正、登録者の移動などに伴う煩雑な業務は、現在別科と学部それぞれの事務担当者が対応している。

３．６　担当者

支援活動の担当者は基本的に留学生教育の現場にいる教員が中心になっている。毎学期の始めに留学生支援関係者会議を開き、各活動の実施予定や募集方法や活動内容の棲み分けを確認・調整する。ML 登録者の情報管理、必要に応じて内容訂正、登録者の移動などの業務については 2002 年度まではすべて別科担当だったが、2003 年度より、留学生を受け入れる部門（別科、学部日本語担当）と教務部の国際交流課が分担することになっている。

３．７　まとめ

以上神田外語大学で 2000 年の秋留学生の受け入れが開始してから 2004 年度現在まで試行的に行われている留学生支援システムと関連活動を簡単に紹介した。全体としては留学生教育担当の教員が中心となったボランティア組織に過ぎないが、外国語学習と異文化交流に熱意を持つ受け入れ学生の積極的な参加により、システムとして成立し企画された交流活動は動き出すことができた。留学生支援に止まらず、国際交流の促進を果たすために、受け入れ学生の参加への評価システムの構築や、大学の１部門として組織化することが今後の課題となっている。

付録：　2004 年度各活動の実施状況

（１）バディ（Buddy）

実施目的	・新生活支援
活動内容	・　空港への出迎え ・　大学構内の案内、施設の使用方法の紹介など ・　寮・アパートの説明のお手伝い ・　日常生活に必要な店の紹介 ・　別科オリエンテーションのお手伝い
実施のスケジュール	・　４月学期開始前後合計３週間 ・　９月学期開始前後合計３週間
留学生対象者	・　別科正規プログラムの新入生
受け入れ学生対象者	・　1-4 年生、特に留学生の母語を専攻している学生 ・　学期開始前に活動できる人
募集方法	・　国際コミュニケーション学科、中国語学科、韓国語学科、スペイン語学科の関係教員の協力を得て専攻語の学生を呼びかける ・　ML
担当者・窓口	・　教務部国際交流課職員 ・　留学生別科日本語教員一名
特記事項	・　ボランティア ・　空港への交通費を支給

（２）E-pal

実施目的	・　新生活支援
活動内容	・　来日前は、留学生の日本留学に対する動機を高め、心の準備ができるように手伝う ・　来日後は、受け入れ学生との交流を深め、お互いの文化や考え方などメールを通して相互理解し合う E メールのやりとりによる情報交換する ・　オリエンテーションのお手伝い ・　空港への出迎え ・　各種文化紹介及びイベント参加・サポート
実施のスケジュール	・　春：3－7 月 ・　夏：6－7 月 ・　秋：8－12 月
留学生対象者	・　別科契約短期プログラムの新入生
受け入れ学生対象者	・　1-4 年生、特に英語を専攻している学生
募集方法	・　ポスター ・　説明会
担当者・窓口	・　該当の短期プログラム担当者一名
特記事項	・　ボランティア ・　空港への交通費を支給

（３）日本語パートナー

実施目的	・　新生活支援
活動内容	・　日常生活の相談 ・　必要に応じて学業に関する日本語の補助も行う
実施のスケジュール	・　学期中、週１回定期的に会う
留学生対象者	・　学部留学生（主に一年生）
受け入れ学生対象者	・　2-4 年生 ・　留学生と積極的な交流を希望し、希望した以上は熱意と責任を持ち週１回定期的に留学生と一緒に活動できる人
募集方法	・　ML ・　ポスター ・　説明会
担当者・窓口	・　学部日本語教員一名
特記事項	・　ボランティア

（４）チューター（Tutor）

実施目的	・　学習支援
活動内容	・　学業に関する日本語の補助 ・　会話パートナー、日本語の勉強の手伝い ・　交流を通して日本の文化や考え方を紹介、日本での生活の相談など ・　日本語のグループチューターリングを実施する
実施のスケジュール	・　チュータリングは原則として週一回 1－2 時間程度
留学生対象者	・　別科留学生全員
受け入れ学生対象者	・　2-4 年生 ・　日本語教育に興味がある人、定期的に留学生に会える人、パソコンでメールのやりとりができる人
募集方法	・　ML ・　日本語教師養成プログラム関係者より紹介
担当者・窓口	・　留学生別科日本語教員二名
特記事項	・　ボランティア ・　Buddy や e-pal 経験者は、双方の希望により、引き続き同じ人のチューターになれる。違う人のチューターも可。

（５）学習相談員

実施目的	・　学習支援
活動内容	・　レポート・論文、口頭発表などのネイティブ・チェックや助言 ・　学習方法や文献探しについての相談
実施のスケジュール	・　学期中、相談員が対応可能な昼休みに実施
留学生対象者	・　学部留学生 1－4 年生対象
受け入れ学生対象者	・　日本語教育専攻の大学院生 ・　日本語教員養成プログラム履修生や交流活動で経験実績を有する学生
募集方法	・　大学院の教員より推薦 ・　日本語教員養成プログラム、学部日本語担当教員の推薦
担当者・窓口	・　学部日本語教員一名
特記事項	・　基本的には無償

（6）クラス・ビジター

実施目的	・ 授業支援
活動内容	・ native speaker として日本語の教室に来て、留学生の発表を聞いたり、コメントしたりする ・ 教室内 authentic situation を作りだし、インターアクション重視の日本語教育を実現させるために手伝う ・ クラスのアシスタント
実施のスケジュール	・ 随時募集・実施
留学生対象者	・ 別科留学生全員
受け入れ学生対象者	・ 1－4 年生 ・ アクティビティーによるが、基本的に日本語母語話者ならだれでも参加できる
募集方法	・ ML
担当者・窓口	・ 日本語授業担当者が各自募集し、実施する
特記事項	・ ボランティア ・ １回のみの参加も可能